

イチゴ「あまおう」の小型ポット苗に適した 夏期低温暗黒処理の変温管理

野菜栽培部
筑後分場

1 背景、目的

福岡県イチゴオリジナル品種「あまおう」の9cmポット苗は、夏期に10℃で3日処理後、16℃で20日間低温暗黒処理すると頂果房の花芽を早く分化させることができます。しかし、アイポットやスーパーアイポットなどの小型ポット苗は、同様な処理を行うと古葉が黄化し、植え付け後の活着不良などが問題となります。

そこで、小型ポット苗を9月中旬に定植する作型で、葉の黄化や心葉の徒長が少なく、花芽分化促進効果が高い低温暗黒処理技術を確立しました。

2 成果の内容、特徴

1) 「あまおう」の9月中旬に定植する作型における小型ポット苗の低温暗黒処理は、11～16℃の範囲で段階的に温度を上げることで頂果房の花芽を促進でき、処理後の心葉の草高は13cm前後となります。これらの処理方法により頂果房の花芽は、1日の平均庫内温度の積算が300℃に達したときに顎片形成期まで誘導されます（図1、表1）。

2) 生産現場で活用する場合は、慣行の10℃3日 - 16℃20日処理に13℃10日間を組み入れて10℃3日 - 13℃10日 - 16℃10日で処理をすると、頂果房の花芽分化率（肥厚後期以上の割合）が高くなり、心葉の徒長や黄化葉の発生が抑制できます（図2、図3）。

3 主要なデータなど

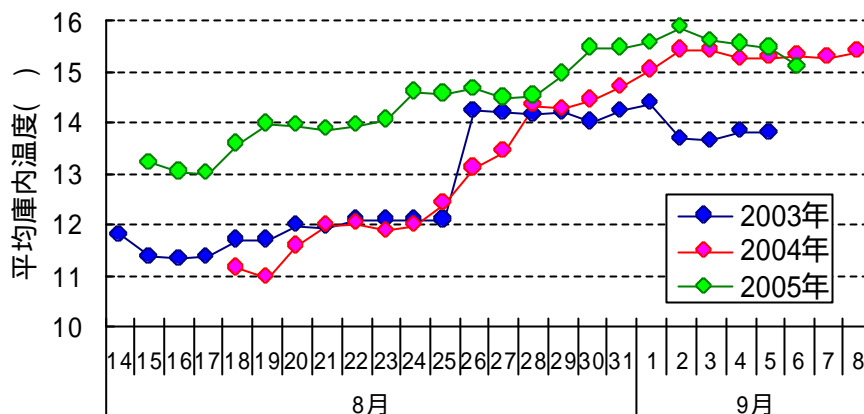


図1 低温暗黒処理における庫内温度の推移(筑後分場)

注) 低温処理期間中の陽光処理は、2003年が3回、2004年および2005年が2回行った。

表1 図1の低温処理での花芽分化と心葉の草高

試験年度	処理日数 (積算温度)	花芽分化 ステージ	心葉草高 (cm)
2003年	23日(295)	分化～顎片形成	13.7
2004年	22日(300)	顎片形成	12.4
2005年	22日(319)	顎片形成	13.0

注) 1. アイポット苗。
2. 入庫前の葉内硝酸イオン濃度は32ppm以下。

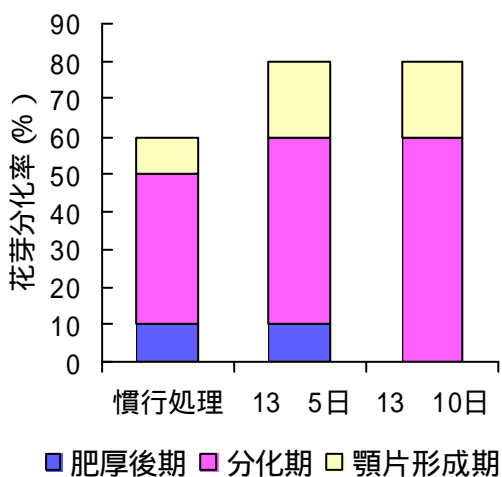


図2 慣行処理に13を入れた低温暗黒処理と花芽分化率

注) 1. 2004年、野菜栽培部試験。
2. スーパーアイポット苗。
3. 処理23日後の調査。

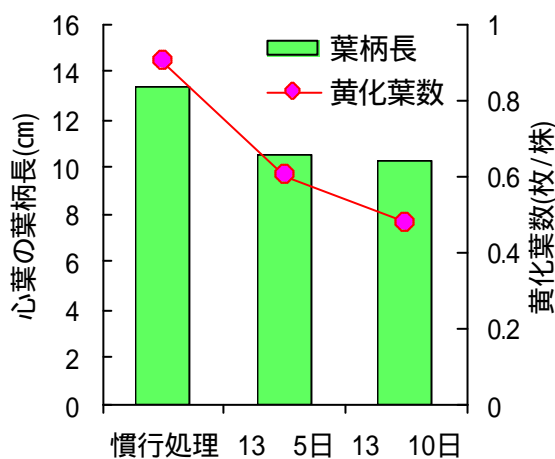


図3 慣行処理に13を入れた低温暗黒処理と心葉の葉柄長および黄化葉数

注) 1. 2004年、野菜栽培部試験。
2. スーパーアイポット苗。
3. 処理23日後の調査。